

ひんご遺跡 現地説明会の資料

一般財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 調査の概要

- ・調査場所：下水内郡栄村豊栄 2 1 9 8 ほか
- ・調査原因：長野県北信建設事務所による県道箕作飯山線建設工事
- ・調査期間：平成 28 年 6 月 1 日～9 月 30 日 (予定)
- ・調査面積：517 m²
- ・検出遺構：縄文時代中期中頃～後期中頃 (約 5,000～4,000 年前)：竪穴住居跡 5 軒、敷石住居跡 1 軒、配石墓 1 基、土坑多数
- ・出土遺物：縄文土器 (縄文時代中・後期、堀之内 2 式期主体)、石器 (石鏃、石錐、磨製石斧、打製石斧、凹石、石皿等)、土偶、石棒、石製垂飾り

2 遺跡の立地

遺跡は千曲川左岸 (北岸) の標高 285m 前後、河岸段丘上の先端近くに立地します。縄文時代の地層は、千曲川の堆積物の砂や粘土で覆われています。現在の千曲川は約 20m 下を流れていますが、西大滝ダムができる前は水量が多く、谷の浸食が激しいため、川は深くなったと考えられます。また、フランセーズ悠さかえの敷地は数 m の土が盛られています。したがって、縄文時代当時の千曲川は現状よりもかなり遺跡に近い位置を流れていたと考えられます。遺跡の範囲は今回調査を実施した県道用地から、北側の国道 117 号線にかけて広がっているようです。



千曲川対岸(南岸)から見たひんご遺跡

3 敷石住居・竪穴住居跡

平成 27 年度調査では竪穴住居跡 17 軒、敷石住居跡 3 軒を検出しましたが、今年度は後期前半の敷石住居跡 1 軒がみついています。床面のほぼ中央にある石囲炉から、千曲川に向かって伸びる出入り口部に平らな石を敷いた、柄鏡形住居と呼ばれる形です。4 枚の石を組んだ方形の炉の底には焼土が残り、土器が埋設されていました。炉の周囲には石は敷かれていません。竪穴住居跡は 5 軒ほど確認されています。



敷石住居跡(南から)

2 軒は炉に埋設された土器だけが残り、住居の平面形はわかりません。その他は壁や床の一部があらわれはじめ、平面円形と方形のものがあるようです。

4 掘立柱建物跡や墓跡

地面に掘り込まれた穴の跡には、形や大きさがさまざまなものがあります。柱の根元を固めた石が残る深い穴がいくつかみつかり、頑丈な掘立柱建物跡の柱穴と推定されます。少数ながら長さ 1.0～1.5m、深さ 30 cm ほどの楕円形の穴は、墓跡の可能性もあります。そのうち、穴を囲む石と蓋石らしいものを伴う 1 基は、配石墓か石棺墓と考えられます。



中期中頃の土器出土状況(王冠型土器)



中期終わり頃の逆位埋設された土器

5 信越境界の縄文土器と石器など

遺跡の地表から深さ 1～1.5m 下に厚さ 20～60 cm の黒褐色の地層があります。この地層から、縄文時代後期前半を中心に、中期中頃から後期中頃の土器が大量に出土しました。

中期中頃の土器は新潟県に分布する土器で、火焰型土器や王冠型土器もあります。それ以降から中期終わり頃の土器は、新潟県中越地方を中心に分布する枳倉式や沖ノ原式に、長野県を経由して伝わった加曾利 E 式など関東地方を中心に分布する土器が伴います。後期前半には新潟県の三十稲場式・南三十稲場式を主体に、関東地方の称名寺式、堀之内 1・2 式、加曾利 B 1 式が見られます。ひんご遺跡の縄文土器は、新潟県を中心とする土器が多く、そこに長野県に分布する土器が伴うという地域的な特徴がありそうです。



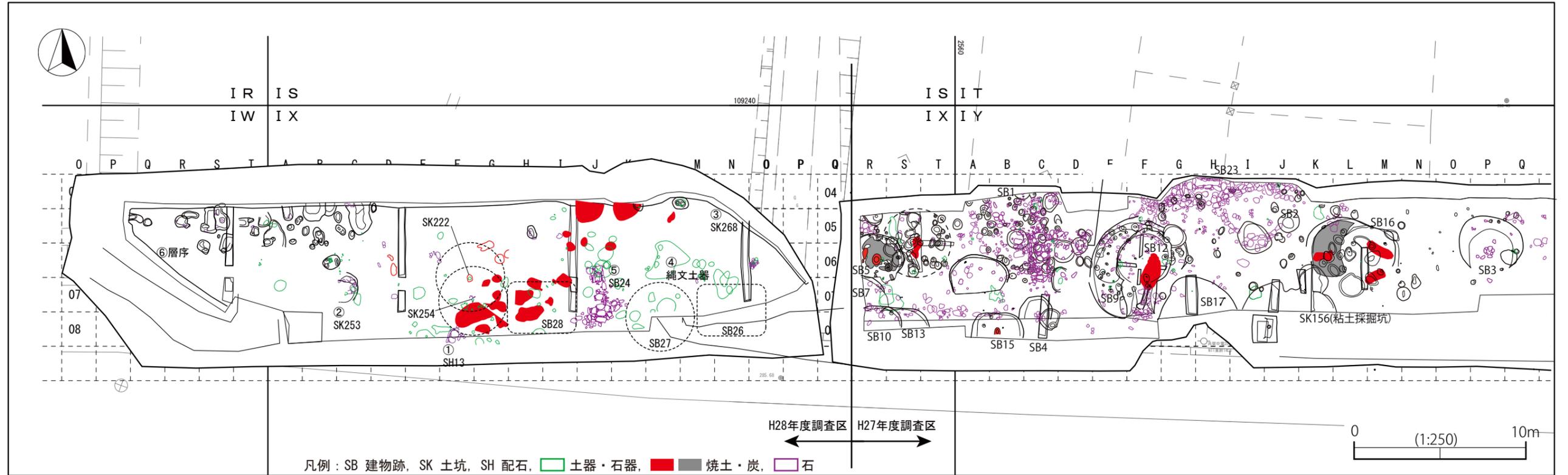
脚付石皿の出土状況

石器はあまり多くはないですが、石鏃のほか打製石斧、凹石などがみられます。土偶、石製垂飾りが複数出土しています。炭化物の中からクリもみつかり、炭・焼土のサンプルからさらに多くの動植物がみつかる可能性があります。

6 まとめ

ひんご遺跡は 2 か年の発掘調査により、面積約 1,800 m² の調査区から、現在まで竪穴住居跡 20 軒以上、敷石住居跡 4 軒をはじめとする遺構群と、縄文土器を主体とする 200 箱以上の遺物が出土しています。土器には縄文時代早期の資料もあり、長期間に及ぶ人々の生活の跡が認められます。今回の調査によって、長野県最北端にあって新潟県中越地方につながる地域の、千曲川本流に密着した縄文集落で営まれた生活の様子や、地域間交流の姿を明らかにしていけると考えています。

遺構分布図



① 配石 (SH13)



③ 柱穴跡 (SK268)



⑤ 炉跡 (SB24)



⑥ 層序



② 土坑 (SK253)



④ 縄文土器 (No. 37)



⑤ 柄鏡形敷石住居跡 (SB24)

